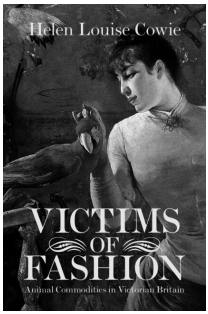
書　評



Helen Louise Cowie, *Victims of Fashion: Animal Commodities in Victorian Britain*
(Cambridge: Cambridge University Press, 2022)

伊東　剛史（東京外国語大学）

英語圏では「アニマル・ターン」以降、特にこの10年間のアニマル・スタディーズの成果は目覚ましい。歴史的な視点からこの問題に取り組む、「動物史」あるいは「人と動物の関係史」では、具体的な研究事例の蓄積が進んできた。そして、2018年にはRoutledgeから*Routledge Companion to Animal-Human History*が、2021年にはDe Gruyterから*Handbook of Historical Animal Studies*が、それぞれ当該分野の概説書として刊行された。*Victims of Fashion*の著者であるCowieは、ヴィクトリア期イギリスを主なフィールドとして精力的に動物史に取り組んできた研究者であり、前者には‘Exhibiting Animals: Zoos, Menageries and Circuses’の章を、後者には‘Cultural History’の章を寄稿している[1]。本書は、その著者による最新の研究成果である。

イギリスの動物史は、19世紀に大きな変化を迎えた。動物虐待防止法の制定や、RSPCA等により組織化された運動によって、動物観や動物の処遇の変化が可視化され、政治、経済、日常生活の様々な場面で体感されるようになった。そのため動物史研究において最初に論点になったのは、動物虐待防止運動を牽引した人物とその思想の評価、あるいは政治文化史や女性史における運動の意義であった。特に女性活動家が変化を牽引した重要なアクターであり、その活動と女性参政権運動とが密接に関係していたことが、こうした学術的関心の背景にあった。一方、評者が以前、本誌に書評を寄せたSarah Amato, *Beastly Possessions*（2015）のように、消費社会の発展という枠組みの中で、不特定多数の消費者と動物との関係を再考する研究も進められている[2]。それは、社会全体の中に動物の問題を位置づけ直す試みとも言える。

本書は、女性消費者のファッションに関連する動物由来の製品と、商品としての愛玩動物に焦点をあてることで、活動家と消費者をともに動物史の重要なアクターとして描き出している。具体的には、鳥の羽根、シールスキン（アシカ／オットセイの革）、象牙、アルパカウール、香水、およびオウムやサルなどの輸入愛玩動物を中心に、それぞれ個別に章が設けられている。そして議論全体を整理するため、これらの章に共通する論点も設けられている。その論点とは次の4つである。①原料が調達、加工され、国際的な物流に乗り、消費者の元に届けられる過程。②女性消費者を対象とした商品マーケティングと、とくに真贋・偽装の問題。例えば、主に帽子に用いられた羽根飾りの製造業者は、動物虐待批判の高まりを受けて、原料となるシラサギの羽根は換羽や営巣の際に入手したもので、シラサギに苦痛を与えていないと主張したが、それが虚偽だと暴かれることになった。③動物資源の占有や品種改良、およびその生態系への影響という大きな歴史的文脈。この論点からは、動物史を生態環境史へと接続する意図がうかがえる。このことは本書巻末で各動物の現状が紹介されている点にも示されている。④「搾取」される動物の苦痛や、種の消滅に対する危機意識、および両者の緊張関係。本書では、個としての動物の苦痛に目を向ける活動家と、種を単位として動物を捉える科学者との違いが、繰り返し論じられている。

さらに本書は2本の補助線を用意し、個々の事例を比較するための枠組みを設定している。ひとつは、科学者や技術者が果たした役割である。動物学者は、製品の真贋を見極めたり、各種動物の捕獲が生態系に及ぼす影響を評価したり、動物を虐待せずに原料を入手できるという製造業者の主張の嘘を暴いたりするなど、動物由来製品の原料調達からマーケティングの過程まで、さまざまな局面に関与していた。技術者も同様に、効率的な原料調達の方法や、代替品の考案といった複数の局面に関与していた。このように本書は、19世紀を通した科学や技術の変化に着目することで、動物史における科学者・技術者の多様なありようを描き出している。一方で、前述の論点④のように、動物の苦痛に共感する活動家と、資源管理の観点から保全を訴える科学者との差が、強調されている。

もう1本の補助線は、グローバル・ヒストリーに接続するためのもので

ある。本書が扱う商品の原料、もしくは愛玩動物のほとんどは、海外で調達された。そして、国際的な取引を経て製品化され、消費者の元に届けられた。そのため原料を調達する人々やそれが行われる地域と、製品化を担う人々やそれが行われる地域は、大きく異なった。クジラやオットセイのような海獣、そして渡り鳥の場合には、動物は人為的な国境を越えて移動するため、種の保全には、利害の異なる国家間が漁獲割当や経済的損失への補償に関する協定を結び、それを遵守する必要があった。これは現代のSDGsの理念の下での、先進国と開発途上国との間の緊張関係へと通じる問題である。

本書は、さらに動物史を身体史や感覚史へと接続し、新たな研究の可能性を示したと言えるだろう。香料の変遷を扱った第5章をとりあげて説明しよう。著者によると、19世紀半ば頃までは、香料の原料として熊脂、ムスク、シベット、アンバーグリス（龍涎香）などがよく知られていた。しかし、世紀後半以降は、動物虐待防止運動の影響だけでなく、植物性香料が求められるようになったことや、合成香料の開発により、動物由来の香料への需要は減少していったという。1891年に『スペクテイター』の記者がロンドン動物園で行った「実験」は、この変化を象徴的に示している。この記者は、ラベンダーやバラなどの植物由来の香料をコットンに浸してヒョウ、ライオン、アライグマなどの展示動物に嗅がせてみた。すると、大半の動物は香料を好むという結果が得られ、動物が香料を好むという仮説が検証されたと記者は考えた（筆者によれば、実際には植物性香料であってもムスクやシベットが固定剤として使用されており、ヒョウなどはこれに反応したと思われる）。筆者はこの事例が、動物の位置づけの変化を物語ると論じる。かつては香料の原料とされていた動物が、19世紀末には香料の被験者になったというのである。そして、この変化は、化粧品の安全確認のために動物実験が義務づけられ、新たな動物の「搾取」が始まる未来を予兆した。

評者は、香りに関する嗜好のこのような変化を、身体感覚の次元で解き明かすことはできないかと考えた。従来の研究で主に扱われてきた動物は、家畜や動物園などの展示動物、使役動物としての馬、動物実験の被験者としてのイヌやウサギなど、いずれにせよ個としての生命と一体性をもった

動物である。しかし、本書が論じる消費者と動物との接点は、各種ファッション・アイテムであった。この場合は、愛玩動物を除き、動物は生命を奪われ、解体され、加工されることで、人が身に纏い使用する製品となった。それにより動物製品は、ビロードのような毛皮の肌触りや、官能的なムスクの香りのように、それを纏う者の身体感覚に訴え、その者の社会的人格や自己同一性を構成した。このようにファッションが身体感覚を媒介として拡張自己（extended self）[3]を構成すると考えると、その際、動物加工品に対する身体感覚は、どのような作用をもち、それを纏う者にいかなる変化をもたらしたのだろうか。例えば、いつ、どのようにして、毛皮のコートやダウンジャケットに身を包まれる心地よさは、忌避感や罪悪感へと変わるのだろうか。身体感覚の変化という視点を導入することで、動物史の歴史叙述に従来の研究にはない奥行きが得られると思われた。

一方、物足りなさを感じたのは、科学史に関する議論である。本書は、ケンブリッジ大学出版会（CUP）のScience in Historyシリーズの一冊として刊行されており、カピル・ラジの「リロケーション」論（西洋と非西洋の異文化交渉の領域に近代科学の発展を見出すアプローチ）などに言及はしているものの、それを掘り下げて論じることはない[4]。本書が取り上げる様々な事例が、「帝国と科学」や「グローバル化と科学」などの科学史の大きな歴史像にどのような修正をもたらすのか、あるいはそれを補強するのかの総括があってもよかっただろう。

以上のように科学史に関しては掘り下げが不足しているものの、動物史研究の最前線と今後の発展可能性を示したという点で、当該分野の研究者にとっては必読の文献である。また、女性史や消費文化史といった関連分野の研究者にとっては、動物という視点を導入した具体的な研究事例として読むことができるだろう。

注

1. Hilda Kean and Philip Howell (eds), *The Routledge Companion to Animal-Human History* (London: Routledge, 2018); Mieke Roscher, André Krebber and Brett Mizelle (eds), *Handbook of Historical Animal Studies* (Berlin: De Gruyter Oldenbourg, 2021).

2. Sarah Amato, *Beastly Possessions: Animals in Victorian Consumer Culture* (Toronto, University of Toronto Press, 2015). 本誌の書評掲載は、第14号（2016年）。
3. Russell W. Belk, 'Possessions and the Extended Self', *Journal of Consumer Research*, 15/2 (1988): 139–168.
4. カピル・ラジ（水谷智、水井万里子、大澤広晃訳）『近代科学のリロケーション――南アジアとヨーロッパにおける知の循環と構築』（名古屋大学出版会、2016年）。